

---

# ちっぽけなうた

水落葉月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ちっぽけなうた

### 【Nコード】

N5516A

### 【作者名】

水落葉月

### 【あらすじ】

「飽きた」それがいつからか口癖だった。熱することもなくただ冷めていくだけ。何か、何か起きればいいのに……

1 .  
ゴールデンウィークが明けたばかりの五月上旬。異常気象なのか、何なのか知らないけれど、気温は夏の並だ。

ふと窓の外を見た。見えるのは隣りの校舎だけ。他は何も見えない。反対側の窓からも校舎しか見えていない。

前を見れば、一生懸命になって現代社会を教える教師がいる。周りには必死にノート書き写している生徒達がいる。でも、中には居眠りをしたり、携帯をいじってる人もいる。この高校に入学して、まだ一ヶ月弱しか経っていない。けれど、もう、生活がパターン化してきている。

正直、高校生活に飽きがきた。

街中にある学校だったから期待してたんだ。何か変わったことが起きるんじゃないかって。

これじゃあ、ド田舎にあたった中学校のほうで断然楽しかった。教室の窓からは空と田んぼが見えていた。田舎特有の景色かもしれない。けれど、それでも日々変化するその景色は見ていて飽きることがなかった。

先生達もこんなに熱を入れなかった。気ままに授業を進めていていた。そして、時々だけ、やたらとテンションが高くなったりした。受験が近づいてきても、それは変わらなかった。

生徒も生徒で、真面目なのかなんなのか。全くわからないような奴等ばかりだった。

田舎の公立中学校だったからそんな調子だったのかもしれないけれど。

二ヶ月近く前に卒業したばかりなのに、ひどく懐かしく感じる。「じゃ、今日はこれで終わりだ」

気づけば教師は教科書を片付け始めていた。

「起立！！」

隣りの席の学級委員長が大きな声で言う。それに合わせて、みんなが一斉に立つ。

「礼！！」

この一声の後はみんなバラバラだ。座る人や、そのまま友達のところへ行く人、次の教科の教材を取りに行く人。

あたしは座った。

机の上に広がるノートを見ると、見事白紙。後で誰かに写させてもらわないとな。

「ちいちゃん、ちいちゃん」

「はいはい」

遠く離れた席からわざわざ成美が来た。

「一昨日会った、ちいちゃんと同じ中学校だった人、名前なんだっ  
た？」

そう言いながら成美はジャケットの内ポケットから携帯を出した。

「あー、柳のこと？」

成美は、そうそう！と携帯に何かを打ち始めた。

柳とはあたしの中学校の時から友達の柳紗恵子のことだ。高校は残念ながら柳のほづがあたしよりはるかに頭が良いのでバラバラだ。

その柳と全く接点がなさそうな成美は一昨日、ファミレスで遭遇した。

2 .

一 昨昨日、柳からメールがきた。

あした、meと一緒にstudyしよう？

断る理由もなかったし、あたしも課題が終わっていなかったから、いいよ、とだけ返した。それでメールのやり取りは終わった。

何故だかわからないけど、あたしと柳が二人だけで集まる時、そのほとんどがテキストだ。時間も場所も決めない。多分、この時間にこの場所だろう。といった感じだ。そして、集中時間を決めてもいないのに、必ず両方が、少し遅れる、というメールをする。

それは卒業してから相変わらずだった。

予定では十時だったが、あたし達がファミレスに集まったのはその一時間後。十一時だった。

「ちい」

「よう。…眉ねえな」

「まあね」

それだけ交わすとあたし達はファミレスに入った。朝だけあつて客は少なかつた。店員も出て来なかつたから、勝手に禁煙席のほうへ向かつた。

「ちいちゃん、ちいちゃん」

禁煙席の入口近くから、聞き覚えのある声がした。

「おー、成美」

成美の他にも、由依と遙もいた。二人も同じクラスの友達だ。

「何してんのさ、こんなところで」

訊くと三人は声を揃えて、カラオケ、と答えた。どうやら昼か

らカラオケで、朝はあたし達と同じ様に勉強会らしい。

「こちら、 高校に通ってる柳」

そう紹介すると、

「はあ！？頭良すぎ！！」

三人揃って目を大きく開いた。そして、三人のことをテキストに柳に紹介した。それからあたし達は三人から離れた隅の席に座った。まだ席に着いて一分も経っていないのに、遙が片手に携帯を持って小走りで来た。

「柳さん、アド交換しよう！？」

今、ちよつと挨拶しただけなのに？と思ったが、遙は入学式の日  
にクラスの女子のアドレスを訊きまくっていたのを思い出した。  
社交的な柳も流石に少し驚き気味だった。でも、最終的には教え  
ていたけど。

午後一時過ぎ、成美達はカラオケに行くと言って、ファミレスを  
出て行った。

「飽きた」

あたしはシャーペンを放り投げた。

「どれくらい進んだ？」

「四ページ」

「少くなっ」

柳はあたしを見ることなく返事を返してくる。

時折、話しかけても返事が返ってこない時もあつた。それだけ勉  
強に集中出来ることが羨しい。

もともと、あたしも柳と同じ高校を目指していた。でも、中二の  
夏頃にはもう、諦めていたけど。あたしにも、真面目だった時期  
はあつた。

「誰か呼ぼうか」

あたしは携帯を開いた。そして、アドレス帳を見た。

「例えば？」

柳もやつとシャーペンを放した。

「んー…。井上とか」

「萌子？良いね〜！」

そう言つて、柳はあたしを指差した。

別に井上は萌子という名前じゃない。だが、いつの間にか萌子になつていた。

あたしは井上にメールをした。今どこにいるのかと。一時すると返事が返つてきた。

「今、学校つてか電車の中。そつちは？だつて」

「…そつか、萌子は私立の学校だつたね」

井上はあたしと同じ公立高校を受験した。あたしのいた中学校からこの高校を受験した人は十人いた。でも、受かったのはたったの三人。井上はその中に含まれていなかった。

勉強会になつてない勉強会をしている、と送ると、井上は来ると言つてきた。

「もう駅に着いたから五分くらいでここ着くつて」

あたしは携帯を閉じた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5516a/>

---

ちっぼけなうた

2011年1月11日16時02分発行